



# ほんものを たべよう

Alter Weekly Order Catalogue

2016.9月2週号

提出日	8/火	水	9/木	金	
	30	31	1	2	
配達日	9/	火	水	木	金
	6	7	8	9	
翌々週分配達日	9/	火	水	木	金
	13	14	15	16	

## オルターの提案

本当に安全な食べものを手渡すために

- 「だれが・どこで・どのようにつくったか」の情報を日本一公開します。
- 「国産」「無農薬」にこだわり、日本の伝統食を守ります。
- 原料段階・飼育段階からポストハーベスト農薬、遺伝子組み換え、放射能汚染、トランス脂肪酸、食品添加物などを徹底的に追放します。
- プラスチック容器・レトルト食品を追放します。

## 種子 SEED

# 有機農業、自然農法は タネから始めよう

自家採種できる有機種子、  
固定種、在来種、交配種のすすめ。



文責 西川 榮郎  
(NPO 安全な食べ物のネットワーク オルター 代表)

## F1の問題

人類にとって永い間、タネは自家採種するのが当たり前でした。昔は高い価格でタネを購入するような農家はなかったのです。

しかし、現在、農家にとってタネは購入するのが当たり前の時代になっています。市場からの均質化の要求、収量が多い品種、収穫の時期がよく揃い作業効率のよい品種、話題性がある販売しやすい品種などの登場がその原因です。

それらは近代の品種改良技術の結果であり、そのほとんどはF1品種(一代交配種もしくは一代雑種)です。

本来F1品種は、雑種は元気で優れていることが多いという意味で、必ずしも悪いものではありませんが、現在のF1品種にはいろいろな問題が指摘されています。

例えばF1品種は、自家採種した場合、メンデルの遺伝の法則で両親の形質が1:2:1で現れ、安定的な栽培が困難になります。そのため、タネの購入が前提となると一握りの種子会社にタネが支配される、放射線といえば突然変異の奇形種を作り、農薬・化学肥料に頼る弱い品種になり(無農薬栽培に向いていない)、味や生命、環境への配慮が犠牲にされている、などの問題があります。

## 雄性不稔の野菜を食べても大丈夫か

さらにF1品種を大量生産する技術として、近年、雄性不稔が開発され、急速にその利用が進められています。

雄性不稔とは、植物の<sup>やく</sup>葎や雄しべが進化し、花粉が機能的に不完全な、いわば不妊症のタネです。これは品種改良中偶然発見された現象で、ミトコン

ドリア遺伝子の異常によるものです。戻し交配を繰り返すことによって、既存のF1品種の雌親をかんたんに雄性不稔化できるので、かつてF1品種作りに必要だった「除雄」(雄しべを手作業で除く方法)をしなくてもすむようになったからです。

この生殖能力を失った、ミトコンドリア遺伝子の異常な雄性不稔の野菜を、日常的に食べることは問題ではないかという指摘があります。

## 企業による生命の独占

また、従来の品種改良の域を超え、遺伝子そのものを操作するという遺伝子組換え(GMO)技術が広がっています。植物の遺伝子に、植物や動物の遺伝子の「かけら」を打ち込んで、企業の都合の良い新しい生命体を作ろうというもので、食の安全性、生命への危機、生態系への脅威など、様々な危険が指摘されています。

このGMO技術を使って、アメリカ・ミズーリ州の綿花の種子会社デルタ&パイン・ランドは、タネをつけても芽が出ない、いわば自殺してしまう遺伝子となる絶滅遺伝子、ターミネーター・テクノロジーの特許を取得しました。現在、この会社はモンサント社に吸収されています。モンサント社はGMO技術だけでなく、ダイオキシン、除草剤(ラウンドアップ)、牛成長ホルモン、人工甘味料アスパルテーム(パルスweet)などを手掛ける悪名高い企業です。

モンサント社によるこの絶滅遺伝子開発は「一社による農業支配に通ずる」と反対され、現在その開発計画は凍結されています。生命そのものを特許の対象としようとしている驚くべき試みです。

ノルウェーのスヴァールバルには、氷の下に巨大な国際種子貯蔵庫が2008年に建設されており、世界中の種子が集められています。どうやら

この建設は、地球人類の幸せのためではなく、巨大企業が種子の利権を独占しようとしているのではないかと考えられています。

## 無農薬に適したタネ

私たちは今、改めて「種子」の重要性に気付くべきときです。農薬や化学肥料に頼らず、有機・無農薬栽培を行うには、元気でおいしい自家採種が可能な品種の種子が必要です。

オルターでは有機の種子や自然栽培の種子、固定種(味や形などの形質が固定され、品種として独立していると認められるタネのこと)、在来種(農家が自家採種したけれど、交雑などで雑種化(雑種化)したものを)を取り戻していくべきだと考えています。F1品種でも自家採種が可能で、雄性不稔でない、まともなF1に限れば否定するものではありません。

## F1でも優れたタネあり

有機種子は、オルターカタログ2012年8月3週号にて紹介しています。

今回は、長野県にある、公益財団法人自然農法国際研究開発センターの自然農法で品種育成した種子をご紹介します。固定種、在来種、交配種(F1)があり、いずれも自家採種が可能です。家庭菜園にもぴったりのタネです。

自然農法交配種は味や草勢、耐病性などに優れたものを選抜育種しています。F2世代でも個々の形質は異なる可能性はありますが、極端に弱い株が出現することもなく、生育に大きなバラつきはできません。元の親が強いので雑種強勢が弱い傾向があります。